

絵葉書や浮世絵などでたどる房総のきのこ文化 — 房総で何故ハツタケが愛されているのか? —

吹春俊光

千葉県立中央博物館
〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2
E-mail: fukiharu@chiba-muse.or.jp

(受付日: 2020年11月6日, 受理日: 2020年12月22日)

要旨 千葉県が位置する房総では全国的に珍しい「ハツタケ好き」という県民の好みがある。ハツタケは日本中に見られるが、食用として特に好むのは現在ほぼ千葉県のみとあってよい。何故か、本稿では、ハツタケが依存する植生であるマツ林が房総半島にいつごろから見られるようになったのかを様々な資料（絵葉書画像や文献資料等）を元に明らかにする。そして不安定な二次林であるマツ林が数百年にわたり安定的に見られたことの背景として、マツと共生する外生菌根菌（きのこ）を管理することによりマツの植生を維持してきたこと、その結果房総ではマツ林が数百年にわたり優占する地域となり、ハツタケに対する嗜好性が生まれたことを解説する。

キーワード: 花粉分析, きので植生を維持管理, 外生菌根, マツ林, 里山

1 はじめに — ハツタケ好きはどこから —

房総の食用きのこ文化を象徴するきのこがハツタケ *Lactarius lividatus* (= *L. hatsudake*) (Neda & Doi, 1998) である (図1)。沖縄から北海道まで広く分布し、江戸時代の文献にも掲載され (坂本, 1835; 岩崎, 1844)、食用として利用されてきた (本郷, 1987)。現在ハツタケは全国的には食用の対象としてあまり重要視されていないが、房総半島で育った現在70歳以上の人々にとっては、ハツタケはふるさとの味、なつかしい美味しいきのことして記憶にのこっている (腰野, 1994a, 1994b, 2000b; 吹春俊光, 2000a, 2000b, 2009c; 吹春公子, 2009, 2019a, 2019b; 高橋, 2014; 大畑, 2019)。また約400年以上の歴史があるという勝浦の朝市でも販売されている (吹春俊光, 2009b, 2012; 2018) (図2)。つげ義春は『初茸がり』(つげ, 1966) を、千葉県大多喜町の宿での滞在をもとに描いた (高野, 1993; 前川, 2017)。ハツタケは房総のきのこ文化を象徴するきのこののである。

しかし、昭和も後半になるとマツ林の激減に伴い、ハツタケは房総の身近な環境ではほとんど採れなくなった。そのためか季節になると百貨店等で、ハツタケやその類縁種 (アカハツ *L. akahatsu* やアカモミタケ *L. laeticolor*) が、通常の野生きのこの価格から比較すると相当高価に販売されている (図3) (吹春公子, 2005)。このようにハツタケを食用として珍重し、積極的に販売するのは、全国的に見ても珍しく、ほぼ千葉県だけであるといってよい。

文献に掲載された野生きのこを指標に同時代の植生環



図1. ハツタケ。

きのこを傷つけると緑色に変色するという特徴により同定が容易であるため古くから食用として利用されてきた。上図: 千葉県君津市, 東京大学千葉演習林, ツガ林, 撮影: 2003年11月4日。下図: 本草図譜 (第54巻, 芝栴類3, 岩崎常正著, 大正時代の復刻) に掲載されたハツタケ (部分), 千葉県立中央博物館蔵。

境を考察する試みは、千葉徳爾の『はげ山の研究』（千葉、1956, 1991）、『はげ山の文化』（千葉、1973）が初めてであり、その他、小川（1978, 1984, 2013）等により行われてきた。また、小椋（1992, 1996, 2012）は、過去の情報（写真、浮世絵、屏風絵、地図、文献等）を元に、当時の植生景観を復元する方法を確立し、有効性を立証した。

本稿では、これらの手法にならい、1) 過去の絵葉書や浮世絵・屏風絵・明治初期の地図をもとに、江戸時代後期から昭和前半頃まで、房総半島にはマツ林が広く見られたことを概観する。そして、2) 花粉分析等の成果や文献を引用し、このマツ林が江戸時代頃から広く房総に広がりはじめ、房総の人は江戸時代からマツ林を大切にしてきたこと、江戸時代から既にハツタケに対する房総住民の嗜好性があったこと等を紹介する。さらに、3) 不安定な二次林であるマツ林が数百年にわたり安定的に房総の里山に見られたこと背景として、マツと共生する外生菌根菌（きのこ）を管理することにより、間接的に里山の植生を維持管理してきたことを解説する。4) その結果、数百年にわたり房総半島はマツ林が広く優占する地域となり、房総で暮らす住民に、マツに生じる食用菌ハツタケに対する嗜好性が生まれたことを解説する。そして、房総に暮らす人たちが、なぜハツタケに執

着しハツタケを愛するようになったのか、房総のきのこ文化の背景を解説する。

併せて、房総のハツタケとマツ林の記録をたどりながら、「絵葉書」資料は「明治後半から昭和前半」の、「文献」資料は「平安時代頃から昭和」の、そして「花粉分析」の結果は「数千年前から」の、我々をとりまく植生環境を示す重要な手がかりとなることを紹介する。

2 ハツタケはマツ林に見られる

房総の食用きのこ御三家とよばれる（吹春俊光, 2017, 2018）、ハツタケ、アマタケ *Suillus bovinus*、ショウロ *Rhizopogon roseolus*（図4, 5）などを採るきのこ狩りは、現在70歳を超えた房総で暮らす世代にとって、1950年代～1960年代の子どもの遊びだった（徳田, 1995; 腰野, 2000a; 川添, 2009; 吹春公子, 2009, 2010; 高橋, 2014; 大畑, 2019）。採れたきのこは家に持ち帰り食用となった。全て外生菌根という栄養摂取様式をもち、20年生～30年生という若い樹齢のマツ科のアカマツ等と共生する（小川, 1978, 1980, 1998, 2007）。つまり若いマツ科の樹木が無いと発生しない。すなわちハツタケが野生で豊富に発生する背景には、若い樹種が豊富に混じる世代交代を繰り返すアカマツ林等が身近に見られたという自然環境が必要



図2. 千葉県勝浦市の朝市で販売されるハツタケ。並んでいるきのこは勝浦産ではなく千葉県いすみ市大原（海岸にはマツ林が見られる地域）で採集されたもの。横の「あみたけ」はチチアワタケと思われる。撮影：2008年10月10日。



図3. 千葉市内の百貨店で販売されるハツタケ。表示には青森産ハツタケの表示がある。内容量を考えると1000円は相当高価。撮影：2015年9月9日。



図4. アマタケとショウロ。アマタケとショウロ（上図）とショウロ（下図）は、ハツタケとあわせて房総のマツ林に生じる「房総きのこ御三家」。この2種は系統的な類縁が近く、生態的にも似た環境と時期に発生する。上図：千葉県山武市蓮沼、撮影：1998年4月23日。下図：本草図譜（第54巻、芝栴類3、岩崎常正著、大正時代の復刻）に掲載されたショウロ（部分）、千葉県立中央博物館蔵。



図5. 絵葉書「(銚子名所) 君が浜の松露取り」。

中央で熊手を持った女性がショウロ狩りを行う仕草で撮影されている。周囲のクロマツ林は、若い20年生位のマツと老成したマツが混じる典型的な海岸林。林床は落葉落枝がつねに取り除かれるような管理が行われている。房総の海岸のマツが健全で、林床管理が行き届き、食用のショウロ狩りが当たり前のように行われていた時代を教えてくれる貴重な絵葉書。千葉県銚子市君ヶ浜、大正から昭和初期、個人蔵。

である。後述するが、マツ林は、自然植生を伐採したあとに成立する二次的で不安定な植生である。ハツタケが永続的にとれ続けたということは、その不安定な植生が、長期間安定的に、身近な自然として保たれていたということに他ならない。

3 房総のマツ林 — 風景絵葉書から

なにげない自然の風景の情報はなかなか残りにくいものだが、名所・観光地の背景としての風景は絵葉書として残されることがある。県内の博物館には、明治から昭和にかけて製作された絵葉書が大量にコレクションされており、絵葉書の中で房総の植生が判別できるものは、その多くがマツ林である(図5, 6, 7)。絵葉書の中の植生風景は、ほぼランダムに集められた房総の植生と考えてよく、その風景絵葉書で判別できる房総の植生の多くがマツ林なのである。

また現在ではマツが植栽されるのは海岸のクロマツ林(小川, 1998)であることが多いのだが、かつての絵葉書を見ると海岸(図5, 6)ばかりでなく、内陸でもマツ(おそらくアカマツ)が優占した風景となっている(図7)。そして写真からわかるのは、マツの巨木(老木)(図5, 6-6, 7-5)ばかりではなく、20~30年生程度の若いマツ林も豊富に見られることである(図6-1, 6-4, 6-7)。すなわち、当時のマツ林が定期的に伐採され更新される、幅広い樹齢をもつマツ林だったということ、若い樹齢を好むハツタケなどの房総食用きのこ御三家が発生する林で

あったこと等が絵葉書から判断できる。

つまり明治から大正にかけて、定期的に世代が更新される幅広い樹齢をもつマツ林が房総半島を覆っていた、ということを経葉書は教えてくれる。

4 房総のマツ林 — 浮世絵と屏風絵から

江戸時代に描かれた浮世絵にもマツ林が見られる(図8)。浮世絵の植物は、湿地の植物やカエデの仲間が、現在でもそれとわかるようにリアルに描かれている点からも、描かれたマツ林は本物のマツ林であったと思われる。現在は、住宅地が密集する、図には堀江猫実(図8左、千葉県浦安市)、市川真間(図8右、千葉県市川市)の周辺などが描かれているのだが、東京湾を背景とする湿地の近くは全てマツ林である。

また江戸時代に描かれた、小金牧という現在の千葉県北西部の下総台地の風景を描いた「小金原鹿狩図屏風」(1795年)(図9)にもマツ林が見られる。馬を大量に飼育するために準備された人為的な草原と疎林の環境が「牧」である(図10)。シイ・カシの自然林や各種二次林を伐採し、馬用の放牧に適した草原として管理してきた場所である。牧の歴史は古く、千葉県北部は軍馬育成の地として知られ、古くは平安時代の『延喜式』にも牧の記述が見られ、起源は蝦夷征伐時の前線への軍馬供給にさかのぼるといふ。屏風に描かれた小金牧は、江戸時代には小金五牧ともよばれ、広大な草原が軍馬育成の地として管理されていた。屏風絵の中の江戸時代末期の風

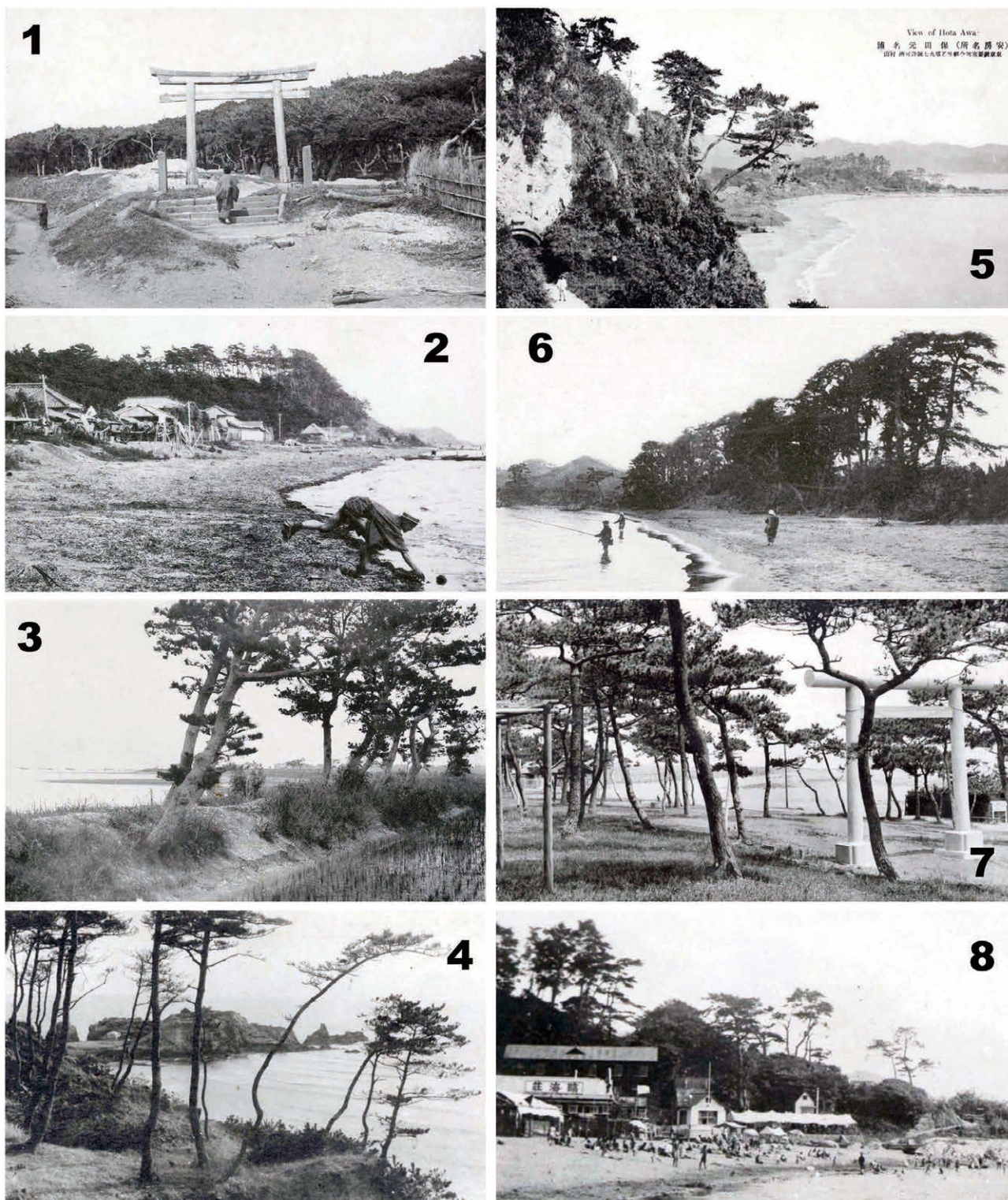


図6. 房総海岸の絵葉書に見られるマツ林（明治後半から昭和初期）。
 この時代の絵葉書には、三方海の房総の海岸に、マツ林が見事に世代交代を行っている風景が残されている。現在では、千葉の海岸には管理されたマツ林はほとんど見ることができない。絵葉書写真はマツ林の植生がよくわかる部分を全て切り抜いて掲載した。また現在の住所を括弧内に示した。1「(稲毛)浅間山登り口」、写真の場所は現在国道14号線沿いの浅間神社の入り口付近(千葉市稲毛区稲毛)。2「(稲毛)袖ヶ浦海岸」、現在国道14号線沿いの埋め立てられる前の稲毛海岸から検見川海岸付近(千葉市稲毛区から花見川区)。3「(姉ヶ崎風景)八反歩ノ海岸」、江戸時代から明治にかけて広い塩田と低湿地が広がっていた海岸だが、現在海岸は埋め立てられている(千葉市原市姉崎)。4「銚子名勝 犬若浦大岩の眺望」、林床は綺麗に管理された若いマツ林(千葉県銚子市犬若)。5「(安房名所)保田元名浦」(千葉県安房郡鋸南町元名)。6「上総湊海岸(其一)」(千葉県富津市湊)。7「(千倉名勝)浜ノ郷海岸」、林床は管理されたマツ林でこの類も豊富に発生するように見える(千葉県南房総市千倉町)。8「(安房名所)保田元名海水浴場」、奥の稜線上は明かなマツ林(千葉県安房郡鋸南町元名)。1-3, 6: 千葉県立房総のむら蔵。4, 5, 7: 千葉県立関宿城博物館蔵。8: 千葉県立中央博物館蔵。

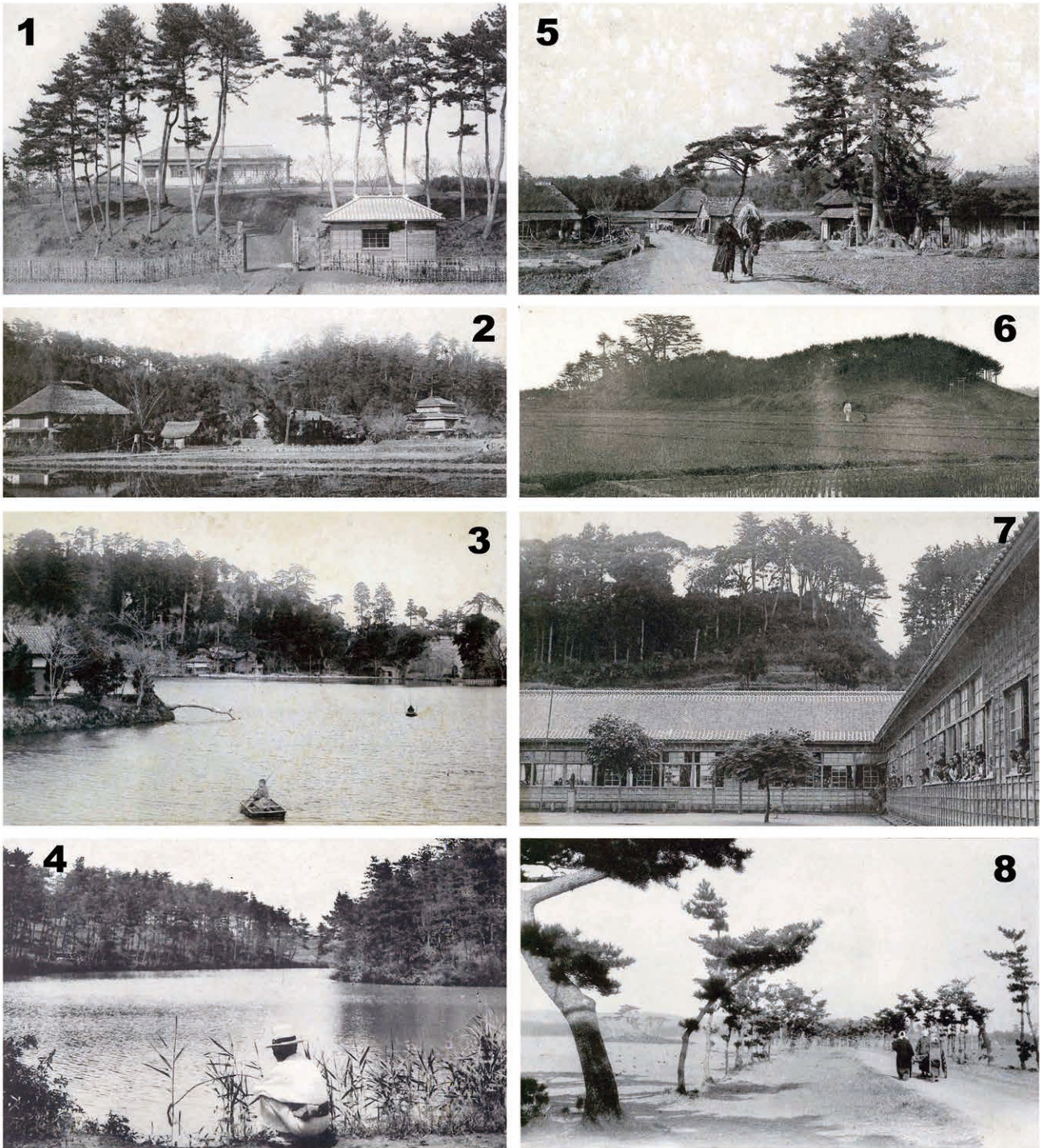


図7. 房総内陸の絵葉書に見られるマツ林（明治後半から昭和初期）。

この時代の絵葉書には、マツ林が見事に世代交代を行っている風景が残されている。絵葉書写真はマツ林の植生がよくわかる部分を全て切り抜いて掲載した。また現在の住所を括弧内に示した。1「千葉県立農事試験場」、見事に手入れされた若いマツ林（千葉市）。2「上総の旧跡宮原家の全景」、屋敷を囲む林は全てマツ林（千葉県市原市牛久）。3「（東金名所）八鶴湖畔勝景（其二）」、八鶴湖を縁取る山の稜線はほぼ全てマツ林、現在の八鶴湖の周辺はシイ・カシ林となっている（千葉県東金市）。4「千葉船田池養魚池」、手前の舟田池から見て奥の両側は見事なマツ林であるが、現在は管理されたイヌシデ・コナラの二次林となっている（図21参照）（千葉県中央区青葉町、千葉県立中央博物館の敷地内）。5「明治村佐是備ヶ崎（源頼朝此処に陣を備ふ）」、屋敷内に見事なマツの大木が見られる（千葉県市原市佐是）。6「（姉ヶ崎風景）古蹟双子塚」、古墳の上は適切に管理された見事なマツ林（千葉県市原市姉崎にある前方後円墳）。7「福岡尋常高等小学校」、校舎をみおろすマツ林が見事（千葉県東金市砂古瀬、東金市立福岡小学校）。8「笹川村 菰敷原」、佐原から小見川を経て銚子へ至る途中の、利根川沿い街道のマツの並木林（千葉県香取郡東庄町笹川）。1-3, 5-8: 千葉県立房総のむら蔵。4: 個人蔵。

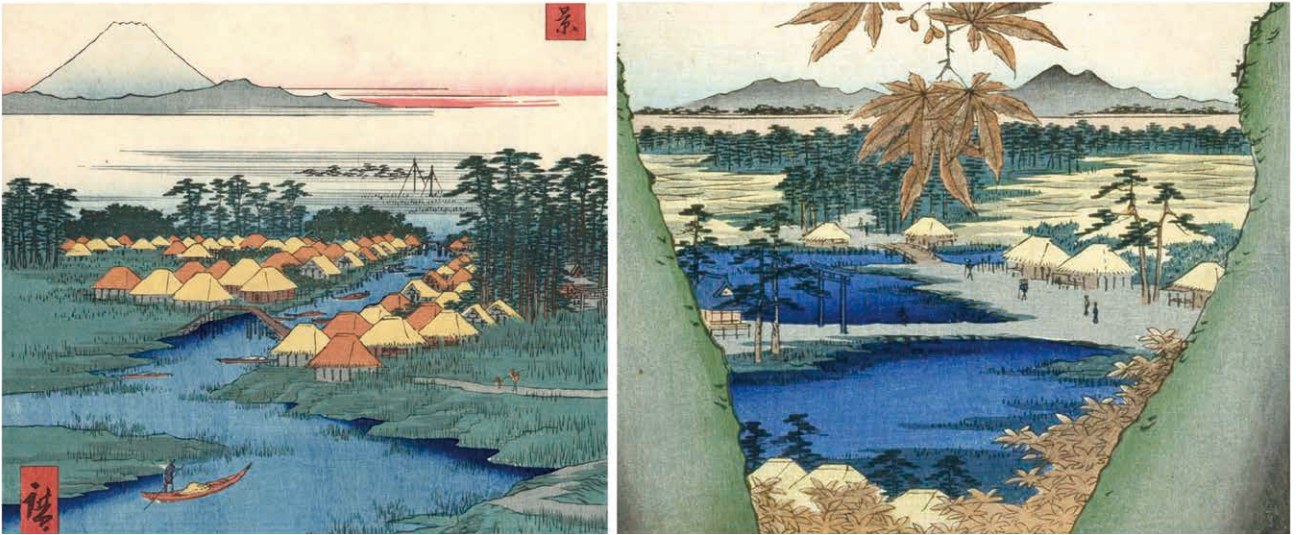


図8. 江戸時代に江戸川沿いの人里に見られたマツ林。

左図：現在の浦安の江戸川河口あたりの風景，奥には富士山，名所江戸百景「堀江ねこざね」，歌川広重作，安政3年（1856年），千葉県立関宿城博物館蔵。右図：現在の市川市真間の風景，紅葉の名所として知られた弘法寺のイロハカエデの間から手児奈の社を見下ろしている構図。現在は手児奈の社の周辺は住宅地になっているが（図25下参照），この絵が描かれた時代に真間付近は江戸川につながる湿地であった，奥には筑波山，名所江戸百景「真間の紅葉手古那の社継橋」歌川広重作，安政4年（1857年），千葉県立関宿城博物館蔵。



図9. 小金原鹿狩図屏風に描かれた江戸時代の房総のマツ林。

現在の千葉県北西部の下総台地にひろがる小金牧で行われた將軍の鹿狩の様子。長く伸びる行列の前後に草原の中のマツの疎林が描かれている。手前から奥まで行列が見えることから草原の草丈はそれほどもなく，定期的に入れ替えられる草原で，背の高いマツは意図的に残されたマツ林であったと思われる。ウマに乗る人や勢子により，ニホンジカ，ニホンノウサギ，イノシシを追う風景が描かれている。小金原鹿狩図屏風（部分），江戸時代，千葉県立中央博物館蔵。



図10. 牧のイメージ。

草原として管理されてきた江戸時代の牧のイメージ。ところどころに放牧された馬の休み場所としての疎林が見られ（右図、上・下）、その疎林は、江戸時代に経済的な価値が見いだされたマツ林であった（本文参照）。左図：「富士三十六景 下総小金原」、歌川広重作、安政5年（1858年）、千葉県立関宿城博物館蔵。右上図：絵葉書「三里塚御料牧場」（部分）、千葉県成田市三里塚、千葉県立関宿城博物館蔵。右下図：絵葉書「習志野名所 楯形森」（部分）、千葉県習志野市、千葉県立中央博物館蔵。

景をみると、その草原にスポット的に残された林は、ほぼ全てマツ林であったことがわかる。

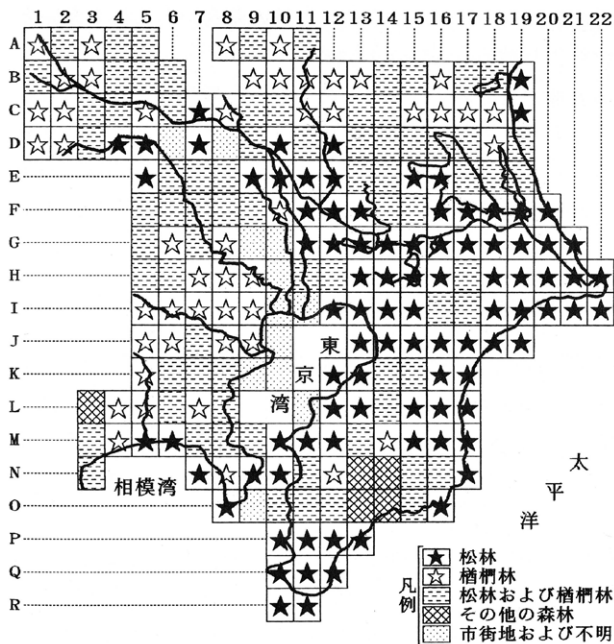


図11. 迅速測図をもとにした明治初期の房総の植生。

房総半島全体を人為的な二次林のマツ林（★）が覆っており、関東平野の西のナラ・クヌギ林（☆）とよい対比を示している。また興味深いのは、現在、千葉東大演習林があるあたり「その他の森林」とされた部分 [13-14, N-O] は、「偵察録」によれば「モミ林やナラ林 [13-14, N]、モミ林やマツ林 [13, O]、モミ林やマツ林やカシ林 [14, O] がその主要な森林」と記録されており（小椋, 2012）、現在の演習林と類似した景観であったことが伺える。図は陸軍参謀本部測量課が明治13年（1880年）から明治19年（1886年）8月にかけて測図した『第一軍管地方2万分1迅速測図』（迅速測図）、および『偵察録』から森林の林種の分布の概要を読み解いたもの（小椋, 1996）（雄山閣から許可を得て引用）。

5 房総のマツ林 — 迅速測図から

風景図や写真以外にも房総のマツ林を立証するものがある。明治時代の初期に、陸軍参謀本部測量課が明治13年（1880年）から明治19年（1886年）8月にかけて測図した関東一円の2万分の1地形図『第一軍管地方2万分1迅速測図』（迅速測図）、および『偵察録』である。これらの資料から小椋（1994, 1996, 2012）は房総の植生を読み解いており（図11）、明治初期の房総半島の人為的な二次林の植生がマツ林（図11, ★）であったことをみごとに明らかにしている。一方、東京湾を隔てて西側、また関東地方北部の人為的な二次林はナラ・クヌギ林（図11, ☆）である。すなわち、江戸時代から明治初期の関東地方の人為的な二次林の育て方が、東側（房総半島）はマツ林、西側（多摩丘陵、狭山丘陵）はブナ科のナラやクヌギの落葉樹という、明瞭な対比をもっていたことがわかる。

6 房総のマツ林 — なぜ房総ではマツが大切にされたのか

関東平野の東西の地は東京近郊の台地という同様な立地であったにもかかわらず、東京湾を隔てて、迅速測図が示すように土地利用が全く異なっていたのは何故か。東の房総半島側がマツの卓越した二次林であったことについて、白井（2002, 2003）は『偵察録』の統計表や様々な文献をもとに、マツ林がもたらすマツの薪炭に価値が

あったからであると結論づけている（白井は下総地方を議論の対象としている）。すなわち大消費地である江戸（東京）を控え、マツの薪が好んで取引されたこと、そしてマツの炭は、主に鍛冶や鋳物用などの工業用木炭として使用されてきたこと等が、薪炭に価値のあるマツ林が二次林として好まれた理由とした。

マツ炭が製鉄に使われ・好まれた理由は、マツの炭は元素リン(P)の含有量が少なく、製鉄時に不純物の少ない鉄をつくるのが可能で、また燃焼速度がはやく、高温になりやすいなどの性質をもつためであるという（岸本, 1998）。マツ炭は鍛冶や鋳物など金属加工用の燃料として強い需要があったというのである。

実際、房総半島から東京（江戸）へ、どの地域から、どれくらいの量、そしてどんな樹種の薪炭が、運ばれていたのか。まず炭について白井(2002, 2005)は、明治10年(1877年)に東京に入荷したマツ炭の8割は、房総半

島北部の下総産であり、主に鍛冶用であったと述べている。また薪については(白井, 2005)、同年東京に入荷した薪は、常陸産が49%（薪全体として）と最も多かったが、下総と上総のマツ材燃料（松東、松林薪）の割合をあわせると、常陸産マツ材燃料（松東、松林薪）を抜く量となることをグラフ化している。すなわち明治10年に東京に入るマツの薪炭は房総産のものが最も多かったのである。

当時、東京へ下総の薪炭を運ぶのに水運を利用した。すなわち、1) 印旛沼周辺は印旛沼経由の水運で直接江戸へ、2) 利根川の布川・木下河岸に集荷できるものは利根川の水運で江戸へ、3) 船橋まで陸運できるものは陸送後に東京湾岸から水運で江戸、というルートで運ばれていた(白井, 2005)。下総の薪炭は利根川(図23上)・東京湾という水運の便があったからこそ栄え、商品価値を持ったのだという(白井, 2005)。下総での最初の鉄道

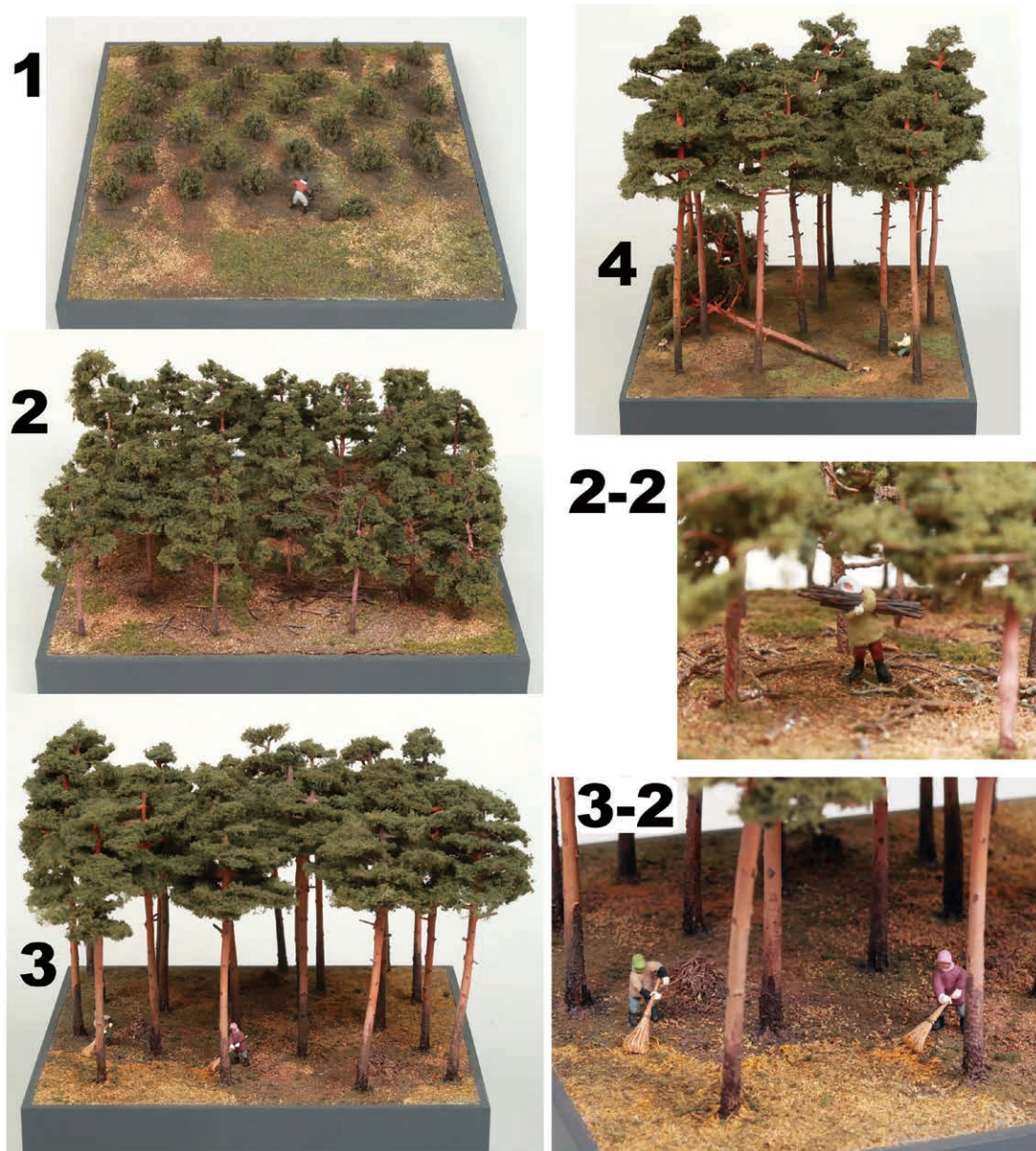


図12. マツ林の管理方法。

1: 苗を植える。2~3: 下草刈りを行い堆肥や燃料のために落葉落枝を回収し(2-2)丁寧に落ち葉掻きを行う(3-2)(有機物を除去する)。4: 30-40年で伐採する。千葉県立中央博物館常設展示室「自然と人間のかかわり」展示中の模型。

開通は、市川と佐倉で明治27年（1894年）であり、この明治10年時点の薪炭の動きは、そのまま江戸時代の物流と考えてよいとしている。

このように、マツの薪炭は地域内消費用としてではなく江戸（東京）へ出荷する価値の高い商品であったこと、利根川や東京湾という水運に恵まれたこと等が、房総で主にマツ林を二次林として重要視してきた主な背景ではないかと白井（2002, 2005）や小椋（1994）は考察している。

房総のマツの利用に関する記述は他にもある。今井（1993）は、マツ葉や下枝が木灰としてカリ肥料に（窒素肥料である下肥とは区別されていた）、マツの間伐材は薪炭材に、マツ炭は製鉄用に利用された（千葉県緑区平川町）と述べている。また行徳（千葉県市川市）の製塩用の燃料に、マツ葉が、幕張、稲毛、黒砂、寒川から船で出荷されたことを、集荷風景の図（図中に「嘉永年間ヨリ明治二十四年に至ル」という説明あり）とともに紹介している（今井, 1993）。房総にはマツの材や薪炭等の活用について多様な記録が残されており、江戸への商品としてばかりでなく、地元でも利用価値の高い大切な樹木だったのである。

7 房総のマツ林 — 江戸時代の房総のマツ林は「栽培」されていた

それでは、房総でマツ林はどのような管理がなされてきたのか。白井（2005）は、偵察録の調査者（陸軍歩兵少尉仙波太郎）の見聞記録を引用し、次のように要約している。「薪炭材の生産に関わる松林の伐採周期は6～7年から8年、10～16年程度とされていた。また、伐採のあとは植林をする旨の記載も見られた。樹種としては松が最も多く、松は建築用材としての利用よりは薪炭としての利用が強調されている場合が多かった」「また仙波太郎が人造、栽培という言葉で表したように、この地方の森林は定期的な伐採と植林によって維持管理された人為的な林であった」。

また白井（2005）は「山林局雑報22号」を引用し、派遣された局員の次のような記述を紹介している。「この地方の人々が薪炭林の育成方法、伐採に至る迄の年限と材量の比較を計算し、薪炭の算出に注意するところ最も厚いとして、この地方における薪炭林としての松、樺の栽培方法、薪炭の生産方法に関し見聞した調査結果を報告している（中略）まさに栽培と呼ぶにふさわしい丹念で計画的な林の仕立て方である」。

「栽培」とは、定期的な伐採と盛んな植林により維持管理されていた人為的なマツの二次林を、第三者である「調査者」が表現した言葉であるが（白井, 2005）、このことは現在の表現で「里山」（服部ほか, 1995; 四手井, 2006）とよばれるようになった森林資源の持続可能な利用方法（図12）が、江戸時代、マツ林を対象に、この房総の地で既に確立し実施されていたことを示すものである。

また白井（2007）は、享保期から寛政期の江戸時代、

幕府が牧の経済的な面に着目し、その経営向上のため、林内の樹木の活用を着想したこと、例えば牧内に飼われている野馬の暑寒しのぎのためばかりでなく、薪炭林として経営するために、様々な努力を行ってきたことを紹介している。また牧内の植林を行う際、すでに数万本のマツやナラの苗を供給する体制が完備されていたことも紹介している。江戸時代、下総のマツ林経営技術は、まさに「栽培」とよべる技術水準に達していたのである。

8 いつごろから房総はマツ林へ — 花粉分析から

花粉分析は過去の植生を知る確実で有力な方法の一つである。房総半島では数多くの地点での花粉分析の報告があるが、関東平野のマツ林の拡大の時期については様々な見解がある（稲田ほか, 2004）。辻ほか（1986）は関東平野中央部の館林台地においてマツ属の拡大が約1300年前と約1700年前の2度にわたって起きたことを火山灰編年により明らかにしており、現在の千葉市村田川付近においても1707年（宝永4年）直後にマツ属花粉が急激に増加していること、その理由として人為的なマツ植栽の可能性をあげている（辻ほか, 1992）。一方、田原・中村（1977）（図13）や米林（1995）は古墳時代以降のマツ属花粉は、ほぼ連続的に増加していると報告している。また更に古い年代として、千葉県銚子市高神東町付近では約4500年から4000年前頃からマツ林の急激な増加が見られること（松下, 1991）、千葉県八千代市新川付近では約3500年前以降稲作の開始とともにマツ林が部分的に成立し約1300年前以降は更にマツ林が増加したこと（稲田ほか, 2008）などが報告されている。各種人為的なイベント（稲作の開始、古墳時代からの土器・埴輪焼成の流行、マツによる里山管理方法の確立等）が、花粉分析が示す二次林としてのマツ林の拡大の原因と考えられ、その結果として江戸時代には房総半島に広くマツ林が拡大していったものと考えられる。（注：本項の年代は未較正年代で表記した）

9 いつごろから房総はマツ林へ — ムササビの絶滅から

千葉県では縄文遺跡からムササビの骨が数多く出土し（落合・繁田, 2010）、またムササビ形埴輪が成田から出土しており（図14）、ムササビはかつて房総半島に広く見られた哺乳類であったと考えられている（下稲葉・宮川, 2019）。しかし文献調査等の結果から、明治から昭和初期には千葉県のムササビは既に絶滅していたか稀であった（落合・繁田, 2010）。

その原因として、ムササビの生息環境である森林相の変化、すなわちムササビの巣となる樹洞の減少が、ムササビの房総半島における個体数の減少の大きな原因と考えられている（下稲葉さやか, 私信）。ムササビが営巣できるサイズの樹洞をつくるのはブナ科のシイ・カシ類やナラ類であるが、そのブナ科森林の減少と同時に、営巣可能サイズの樹洞をつくらぬマツ科のマツ類が増加し、そのことがムササビの生息数を激減させたのではないかと下稲葉は推測している。すなわち前述の花粉分析

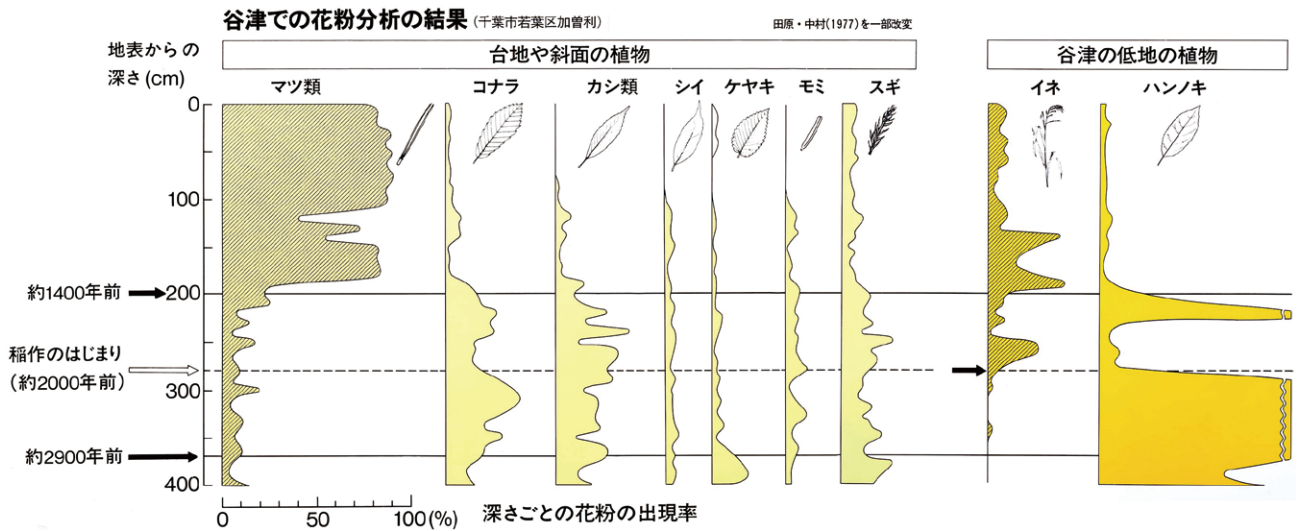


図13. 千葉市におけるマツ類植生のはじまり。
千葉市内（若葉区加曾利地域）の都川の支流、関東ローム層の浸食谷にある水田地帯で試料採取し花粉分析により植生変遷を示したものの（田原・中村, 1977）。図はこの地域で1400年前頃からブナ科（カシ類、コナラ、シイ）が減少し、マツ類（マツ属）が増加していることを示している。図中コナラ、カシ類と表示されたものは、引用論文（田原・中村, 1977）中、それぞれ *Quercus*, *Cyclobalanopsis* と表記されている。千葉県立中央博物館「かかわり展示室」に展示中のパネル「花粉が語る谷津周辺の植生のうつりかわり」の一部を拡大したもの。



図14. ムササビ形埴輪。
南羽鳥正福寺1号墳、千葉県成田市南羽鳥高野、古墳時代後期（6世紀前半）、成田市蔵。

が示すように、ブナ科樹種が減少しマツ林が増加していった時期（図13、古墳時代から江戸時代）、房総半島ではムササビは樹洞という住み処を失い、房総から消えていった、というわけである。房総半島でのムササビの絶滅という現象も、房総半島でのマツ林の増加を間接的に教える、ひとつの指標となる可能性が高い。

このように、花粉分析ばかりでなく、過去あまり活用されてこなかった生物情報が環境指標として過去の環境推測に使用できる可能性がある。例えば、地上を移動する能力の低い生物群（植物と共生する外生菌根菌類 [きのこ類]、生物遺体として残りやすい各種動物群集など）の過去の情報、また過去に採集された植物の腊葉標本等の標本情報は、時をさかのぼることのできる地域の環境指標となり、過去の環境を復元する道具類となる可能性

がある。博物館がもつ複合的な生物の標本情報が、過去の環境を再現するタイムマシンとなるのである。環境復元によく利用される定番生物群集ばかりでなく、各地に蓄積された各種生物標本類の情報は、創意工夫により過去環境の復元と推定に、更に活用できる可能性がある。

10 房総のマツ林を証拠づけるきのこ — 平安時代から明治までの茯苓の記録

房総にマツ林が広く見られたことを示すきのこはハツタケばかりではない。マツにはサルノコシカケの仲間、ブクリョウ（以下、茯苓）（別名マツホド、*Wolfiporia extensa*、担子菌類、ヒダナシタケ目、図15上左）というきのこが特異的に寄生し、マツの根（地下）に、ソフトボールからハンドボール大の、菌による球形のコブ（菌核）をつくる。ブクリョウの存在はマツ林の存在を立証する。

このブクリョウの菌核は、生薬（図15上右）としての価値があり、『史記』（司馬遷著、BC91年頃完成）に「伏霊は千年を経た松脂であり、これを食べれば不死の身となる」という記述があるという（小林, 1983）。「伏霊」という表記からも、人々は地中という目に見えないところで、人知れず結ばれる不思議の玉に霊力を感じてきたに違いない。中華文化圏では古くから貴重な生薬として珍重されてきた。また茯苓の子実体（きのこ）は地上倒木上等に生じるが、生薬となる菌核は地中に生じるため、地表面から探しあてるには特別な知識と特殊な技術が必要であり、希少な珍品であった。例えば房総には地中に埋もれた茯苓の菌核を地面に突き刺して探し当てるゾンデ棒のような「茯苓突き」とよばれる専用の道具が知られている（図15下、谷城, 1984）。

茯苓の人気の高さや珍奇さを教える平安時代の記録が残されている。平安時代の貴族、藤原宗忠の日記『中右

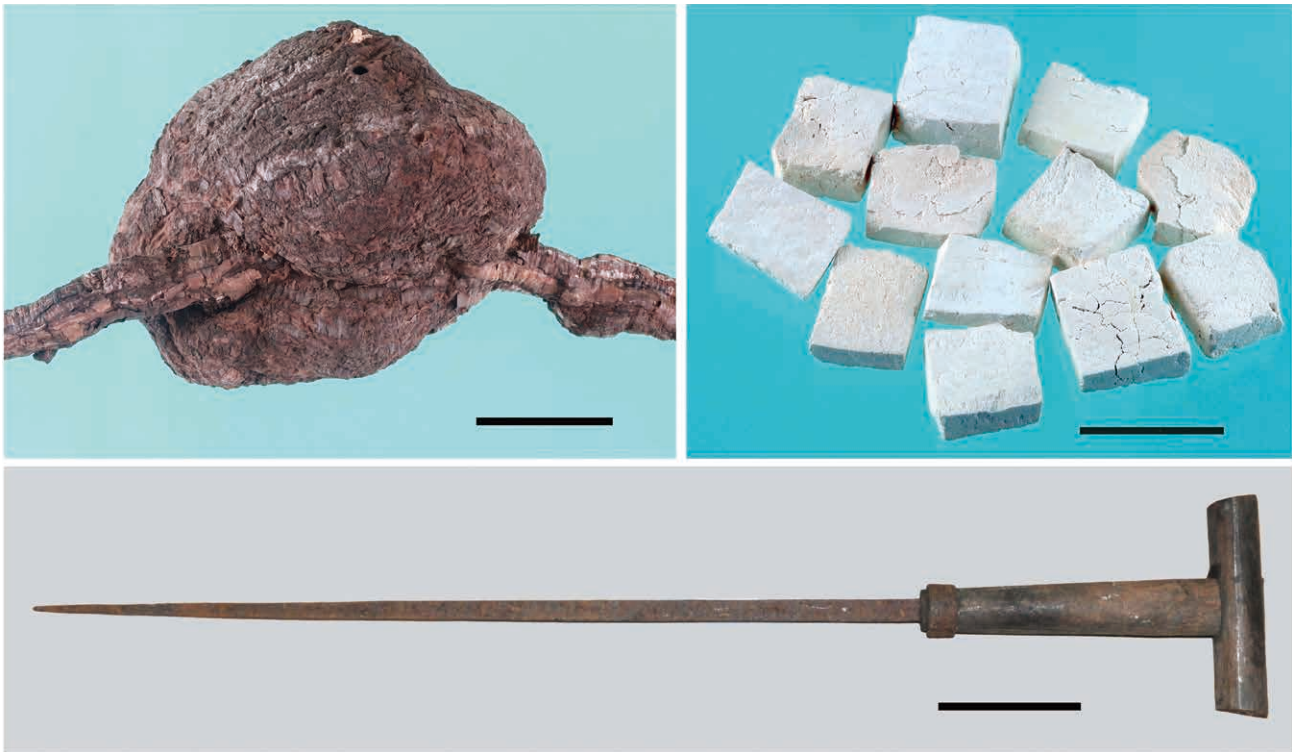


図15. ブクリヨウの図。

上左図：ブクリヨウの菌核，FB-2081 (CBM)，千葉県成田市舟形，1984年5月25日，谷城勝弘採集。上右図：中国から生薬として輸入されたブクリヨウの半加工品。下図：ブクリヨウ突き，撮影：糠谷隆，千葉県立中央博物館大利根分館蔵。スケール：5 cm (上，右・左)，10 cm (下)。

記』(増補「史料大成」刊行会，1965)の天永3年(1112年)7月4日には、茯苓の記述がある。【原文】「四日、早旦参院、以顕輔朝臣被仰云、従因幡国伏〔茯〕苓と云葉出来之由所聞食也、有御用事、早遣取可進上之旨所奏也」。【現代語訳】「四日、早朝院(白河院)のところに参上した。(藤原)顕輔朝臣を通じて仰せられて言うことには、『因幡国で伏苓という薬が見つかったと聞いた』ということであった。(白河院が)御入用とのことである。『早く人を遣わして採集し、進上いたします』と奏上した」。平安時代の貴族の間には、生薬としての茯苓が深く信頼され、広く知られていた、ということを示すよいエピソードである。

また平安時代の法令集『延喜式』(967年施行)の巻第37(神道大系編纂会，1993)には、全国から納められる薬用植物(諸国進年料雑薬)に茯苓が登場する。千葉からは、安房国(18種)、上総国(20種)、下総国(36種)の生薬原料が目録化されており、上総国からは茯苓28斤(約16.8 kg，1斤=600 gとして計算)、下総国からは茯苓6斤(約3.6 kg)が定められおり、安房国の目録には掲載されていない。茯苓がマツ林に生じることを考えると、当時のマツ林は上総、下総、安房の順に、多く見られたということを反映している可能性もある。いずれにしても生薬としての茯苓は平安時代から大変な貴重品であったことを伝えるものである。

江戸時代の房総の茯苓の記録もある。松平(1989)によると、『印旛村史』(印旛村史編纂委員会，1978，1980)に、天保期(1830-1843年)、萩原村(下総国印旛郡、現在は印西市)において、茯苓渡世の人たちが茯苓を採集

して販売し(茯苓稼ぎ)、また幕府へ上納していたこと、茯苓の上納の時期が12月から3月の農閑期であることが記録されている。面白いのは、村内取り決めで御用茯苓鑑札を得た農民がこの威をかりて悪行をしないよう取り決めた証文や、御用薬種の茯苓採集のため人手が必要であるという理由を盾に宿場の大通行(殿様の通行)に際しての助郷(人足・馬の供出)免除願いを提出したという記録もあるという。やはり貴重な生薬である茯苓は、江戸時代においても重要で貴重なマツ林の特産品であったようであり、茯苓を産する地域や、地中に生じる茯苓を採集することのできる特殊能力をもつ人たちは、当時の政府からも特別扱いを受けていたことが伺える。

その後も茯苓は生薬として房総で知られた存在であったらしく、例えば『八街町史』(八街町史編纂委員会，1974)に、明治時代の産物として茯苓・松露の記述がある(8章第1節農業，425頁)。

平安時代から江戸時代をとおして昭和の時代まで、貴重な生薬であった茯苓は、房総に暮らす人たちの貴重な現金収入や権威の源でもあった。茯苓が産したという記録は、その記録が残された平安時代から明治までの時代に、房総の豊富なマツ林の存在を教えてくれる有力な証拠であると同時に、ハツタケも発生したであろうということも教えてくれる、もう一つの証拠でもある。

11 房総のマツ林を証拠づけるきのこ — 江戸時代から明治・大正のハツタケの記録

(1) ハツタケを長年独占し訴えられた名主の話(江戸時代)

白井(2004)は、明和元年(1764年)の12月に、現在の松戸市に位置する金ヶ作村で、名主がハツタケを独り占めするという事件で、反対派に訴えられた記録を紹介している。「毎年8月(旧暦)になるとハツタケが始め9月(旧暦)までは発生しているが、名主の忠七は、名主という権威をかざして、村人達が所有する山を立ち入り禁止とし(山留)、ハツタケを独り占めして江戸表へ出荷し、毎年およそ鑢銭200貫文を得ている。このことが24~25年続いている。けしからん名主だと奉行所に訴えた」といった内容である。白井(2004)は、この記録から明和元年(1764年)より24~25年前からハツタケがとれ続けていたということは、すでに元文元年(1740年)頃には、ハツタケが豊富に採集できるほどの(若い)マツ林となっていたと解釈できるとしている。本稿でこの記録が重要になる点は、マツ林の存在に加えて、江戸時代にハツタケを江戸に持っていくとお金になったということ、そして江戸時代から、既に江戸でも下総(千葉)でも、ハツタケという食用きのこに対する嗜好が強かった、ということである。

(2) 贈答品としてのハツタケの記録(江戸時代)

幕末に房総に残された文書には、ハツタケが贈答品として登場し、江戸住まいの旗本吉田家当主「収庵」氏が、初茸献上を大層喜び大好物として食べていたこと、大量に贈られた年には礼状の代筆をしている部下にもお相伴をさせて「御満悦」であったこと、初茸等の献上を、命令する側の立場ながら懇願している様子、などの記録が残されている(田川・高橋, 2021)。江戸時代にハツタケが非常に美味なきのこととして認識されていたこと、現在のマツタケのようにハツタケが贈答品としての価値をもっていたことを示す貴重な記録である。

(3) 千葉市内のハツタケの記録(大正時代)

現在の千葉市緑区誉田町付近で、大正時代にハツタケが豊富に採れたという記録がある(千葉県千葉郡教育会, 1926)。「本村(現在の千葉市緑区誉田町)は又茸狩の名所としては古より野田(現在の誉田町)、八街(千葉県八街市)と並称せらる。茸の発生するは独り野田のみならず、村内至る所の松林に初茸を発生す。近来山林開拓のため其面積大に減じたりと雖も尚発生期には多少地理を知る者は数時間にして数籠の得物を見るに難きにあらず。気晴れ天高き日曜等には学生小児又は千葉町に於ける官公吏等の杖をこの地に曳き清遊を試むるもの甚だ多し」。千葉県内の千葉市、八街市は大正時代のハツタケの有名な産地であったこと、ハツタケ狩りは世代をこえての娯楽であったことの記録である。また大正時代頃は、まだハツタケの採れるような若いマツ林を含む、世代交代のできるマツ林が、千葉市内陸に豊富に見られたということの記録でもある。

(4) 県内のハツタケに関する新聞記事(大正時代)

新聞(『萬朝報』, 1919年[大正8年]10月9日, 日刊3面)

にも、県内君津市でのハツタケの記録がある。「君津郡地方の初茸は、次の日曜(十二日)頃が取頃なるべく、同郡には松林が少なく只馬來田、平岡又は鹿野山地方には幾分ある位で従って産額も少なく、地方の需要を充たすに過ぎざるも品質よく、近時久留里線を利用して、木更津辺から家族同伴で茸狩に行く者多し、因みに本年の相場は一膳(九寸四分)十五六銭位なり」と。ハツタケが発生する若いマツ林が、海岸地帯ばかりでなく、内陸(馬來田、平岡、鹿野山)にも存在していたことを示すとともに、千葉県のきのこ狩の対象がハツタケであったこと、きのこ狩が家族レジャーであったこと、ハツタケに相場というものがあり金銭で取引されていた野生きのこであったこと等を教えてくれる貴重な記録である。

(5) 三里塚御料牧場でのハツタケ狩り(昭和初期)

三里塚御料牧場での1927年(昭和2年)10月9日の茸狩を伝える絵葉書(図16)が残されている。その裏に添付された解説には「秩父宮殿下を初め各宮様が千葉県三里塚御料牧場に成らせられ初たけ狩りを遊ばされました。

(中略)三里塚葉山の松林に向はせられ、一時間余りの間に籠一杯の御獲物を御採りなされました」と記録されている。すなわち、皇族が千葉県三里塚御料牧場でハツタケ狩りを行い、1時間ほどの間に籠一杯のハツタケが容易に集まったという記録になっている。絵葉書がつけられた昭和初期に、ハツタケが三里塚で豊富に採れたということは、御料牧場内のマツ林は、江戸時代の「牧」(図9, 10, 本稿7項)のように、馬や牛が休憩に使える程の樹高をもつ実用的な成木のマツ林ばかりでなく、そこにはハツタケの採れるような20年生くらいの若いマツがたくさん混じる林であったこと、世代交代可能なマツ林として管理されていたことを示している。また特筆すべきは「ハツタケ狩り」という茸狩の行為が、皇族の公式行事としても可能な国民的な娯楽の一つであったこと、ハツタケが皇族も食用きのことして利用する食用きのこの代表のひとつであったこと等も伝えている。

12 きのを通してマツ林を管理する — 絵葉書と浮世絵から

マツという植物は、元来山の稜線上などチャートのような岩がむき出しになった、土壤に有機物が少ない貧栄養な場所に安定的に見られる(小川, 1980, 2007)(図17)。貧栄養という環境は、マツという植物が好むというより、マツと共生する菌類が有機物の少ない貧栄養な環境を好むためである。すなわち、マツと共生する菌類(ハツタケなど)が、マツの立地を決定しているともいえる(吹春俊光, 2004, 2009a, 2017)。栽培条件下では、マツ自身は畑のような富栄養下でも生育するため、野外で他の植物と競合する場合に、結果として貧栄養な立地に追いやられるのかもしれない。

有機物が堆積しやすい里の平らな環境では、房総であれば潜在自然植生であるシイ・カシ林が成立する。そのような植生を伐採すると、短命な二次林の代償植生であ



秋晴の郊外に宮様方の御茸狩 (三十九)
 高く澄み渡つた秋晴の去る九日、秩父宮殿下を初め各
 宮様が千葉縣三里塚御料牧場に成らせられ初め各
 遊ばされました。當日宮様方には午前十時牧場の事務を
 所集りの上、御乗物で三里塚山松林に向はせ
 られ、一時の間、御茸狩の御獲物の御採りなされ
 ました。寫眞は御茸狩の後一杯の御獲物の御採りなされ
 あります。 (向つて左にお立の方が秩父宮殿下)

図16. 三里塚御料牧場でのハツタケ狩を伝える絵葉書。

裏にそえられた解説 (図右) には、皇族が千葉県三里塚御料牧場でハツタケ狩りを行い、1時間ほどの間にかご一杯のハツタケが容易に集まったことが記されている。このことから、牧場内のマツ林はハツタケが採れるような、20年生くらいの若いマツがたくさん混じるマツ林であったこと、ハツタケ狩りが、皇族の公式行事としても可能な国民的な娯楽の一つであったこと等も教えてくれる貴重な1枚の絵葉書である。「秋晴の郊外に宮様方の御茸狩」、1927年 (昭和2年) 10月9日、個人蔵。

るマツ林となる。しかし、マツ林は二次的で不安定で短命な植生であるため、房総であれば数十年を経ると元来の植生であるシイ・カシ林に戻っていく。その理由は、次に述べるように極相となる外生菌根をつくる樹木が共生する菌類の特性に支配されていることと関係がある (小川, 1996, 1998)。

植物と菌類は根の部分で互いに栄養のやりとりを行って暮らしている。植物は菌類にその光合成産物 (糖類など) の数割を菌類に投資し、菌類は植物に窒素やリンなどの無機塩類と水を供給するという役割をもっている。これは陸上に植物が上陸した時点から続いてきた関係である (齋藤, 2020)。植物と菌類は長い共進化の結果このような関係を築いているため、植物と菌類の共生の組み合わせは特定の関係となる場合が多い。マツ類が共生する外生菌根性の菌類は、房総のきのこ御三家のようなハツタケ、アマタケ、ショウロ、そして房総には見られないマツタケなどで、全て有機物が少ない貧栄養な環境を好む菌類と共生している。マツ類が貧栄養な環境に健全に生えるのは、このように、貧栄養な環境を好む外生菌根菌類と特異的に共生しているからである (小川, 1980, 2007)。

元来、人が暮らす里山は富栄養化しやすい。そこにマツが安定的に多く見られるようになったのは、里山を貧栄養に管理することになったことが大きな原因である。すなわち里山から燃料や堆肥という有機物を得るため、常時マツの林床から落葉落枝を取奪する。その結果、林床は常に貧栄養に保たれ続ける。このような人の生活が、山の稜線と同様な貧栄養の環境を里に作り出し、意識せ

ずして貧栄養の外生菌根菌 (きのこ類) を長期的に里山に育て、貧栄養のきのこ類と共生するマツ類が暮らすことができる環境が里山に広がったためである。すなわち、人の暮らしが間接的に外生菌根菌 (きのこ類) をコントロールすることになり、その二次的な結果として植生をコントロールし、不安定な二次林であるマツ林を、長期的・安定的に成立させる結果となったのである (吹春俊光, 2004, 2009a, 2017, 2018)。つまりマツ林は、きのこを人為的に管理することにより成立した林なのである。

では、本稿7項で述べたように、江戸時代から始まったマツの「栽培」 (白井, 2005) はどのような管理方法だったのか。千葉県立中央博物館にマツ林の管理方法の模型が展示されている (図12)。マツの苗が植林されたあと、枯れ枝集め、下草刈り・落ち葉掻き、というように、有機物を常時取奪する管理方法である。また40年生程度で伐採・更新し続ける。林床は有機物が少ないように綺麗に保たれている。

この里山マツ林の管理方法は、里山の二次林であるコナラ林の管理方法に似ている (図18)。コナラ林も下草刈りをしたあと落葉落枝という有機物を除去し、林床に光がはいりやすくするように管理した人為的な二次林である。関東の西に位置する武蔵野台地には、江戸時代初頭から「毎年林床を刈り払い、低木類や草本類を除去し、落ち葉を掻き集め」、「燃料用などに平地林を15~25周年周期で伐木して薪炭材を採取し、その後は萌芽更新にまかせて、クヌギ・コナラ林を再生してきた」平地林が、明治時代になっても広く残存していた (犬井, 1982)。薪・肥料・飼料・苗床材料等を採集する林として維持管理さ



図17. 尾根に生えるアカマツ。

元来アカマツは、山の尾根の岩がむき出しになったような、あるいは急斜面の、落ち葉の層の少ないやせた土地（有機物の少ない貧栄養な）で暮らしていた植物。長野県木曾郡木曾町，撮影：2010年8月19日。

れてきた関東の平地林（犬井，1992）は、本稿で紹介したように房総のマツ林と管理方法が類似する。しかし、このクヌギ・コナラの平地林の管理方法が、マツ林のように外生菌根菌を介在させる管理方法なのか、現段階で浅学で不明である。

房総のイヌシデ・コナラ林も放置すれば富栄養化し、常緑ブナのシイ・カシ林に遷移する二次林である。マツ林やイヌシデ・コナラ林を、里山を構成する主要装置とした里山の暮らしは、燃料など人の生活に必要なエネルギーを全て生活圏から得ることを可能とし、究極の持続可能なシステムとして江戸時代に完成した。

この有機物を里山から収奪するための道具が、目箒と熊手である（図19）。江戸時代から数百年間、里山の有機物の除去装置として、この目箒と熊手が活躍してきた。くしくも千葉県市川市国府台あたりの風景を描いた浮世絵、そして市原市で撮られた絵葉書に、目箒と熊手の姿が捉えられている（図20）。このようなシンプルで簡易な姿と道具こそが、房総ばかりでなく、日本中で不安定な二次林であるマツ林を、安定的に管理するための、外生菌根菌を管理する装置であった（吹春俊光，2004，2019）。また燃料や食料の、究極の持続可能なシステムである日本の里山を実現させた維持管理装置でもあった。

筆者の勤務する博物館の野外施設（生態園）でも、二次林であるイヌシデ・コナラ林を維持するため、下草刈りを行い林床から落葉・落枝などの有機物を取り除く管理方法で維持されている（図21）。しかし昔の里山管理



図18. 下草刈りの管理図。

上図：雑木林の林床管理（落ち葉掻き）。下図：管理の有無による雑木林の変化。右の林は毎年林床管理を実施、左の林は過去10年間林床管理を行っておらずアズマネザサなどが繁っている（大野，2003）。「雑木林」という語は明治時代（1900年）に、徳富蘆花が武蔵野の林の四季の美しさを賛美したときにつかった語。雑木林の伝統的な管理内容は「伐採（萌芽更新）」、「成林後の下草刈りと落ち葉掻き」。冬に集められた下草と落ち葉は、おもに堆肥にされた。雑木林の管理が中止された場合、林床の植物へ複合的な影響（萌芽更新の途絶、日照の減少、落葉落枝の林床植物への物理的な障害など）を及ぼす（大野，2003）。また管理中止にもなる落ち葉等有機物増加の外生菌根菌への影響について本稿マツ林の項で解説したが、コナラ外生菌根への影響は不明。東京都青梅市新町，武蔵野台地の末端。写真：大野啓一。

と異なる残念な点は、除去した有機物を堆肥や燃料など有効利用せず、全てゴミとしている似非里山であることだ。

13 マツ林からシイ・カシ林へ — 浮世絵と屏風絵から

江戸時代を中心に長期安定的に維持されてきた、ハツタケが採れるようなマツ林だったところが、現在はシイ・カシ林にもどっている状況を確認できるところがある。千葉は江戸から近かったこともあり、江戸近郊の観光地であった鴻之台（千葉県市川市国府台）付近は、浮世絵や絵葉書が数多く残されている場所でもある（図22）。現在の江戸川にかかる総武線や京成本線から北、現在、和洋女子大のビル付近から国府台公園、里見公園付近の江戸川東側岸に面した河岸段丘は、かつてはマツ林に覆われていたが、現在シイ・カシ林となっている（図23，24）。また「真間の手児奈」で有名な、市川市真間付近から和洋女子大ビル方面を眺めた場所からも、かつてマツ林であったところが、現在シイ・カシ林となっている



図19. 目籠と熊手。
現在千葉で使われているもの。目籠(左)と熊手(右)。資料提供：
高橋昇・ちか氏。

(図24). 昭和後半の燃料革命により、里山の林床に燃料を求めなくなり、前項で述べた林床の貧栄養管理が放棄され、元来の植生にもどったことを示している。このように、江戸時代や明治～大正の浮世絵や絵葉書の図像と現在を比較することにより、植生の遷移をたどることができる。

14 まとめ — 房総のきのこ相の歴史ときのか文化

以上、房総の人々のハツタケ嗜好の由来をさぐるために、房総半島の植生がいつ頃からマツが優占する地域となったのか、それは何故なのか、をたどってきた。すなわち [約5000炭素年以降]、房総半島にはシイ・カシの常緑ブナ科が広がり (辻, 2001), 急速に照葉樹林化が進んだが、[古墳時代頃] から人為的な伐採がはじまり、マツなどの二次林がひろがっていった。[江戸時代頃] には、房総半島は、樹高がひくい二次的な植生におおわれ、はげ山や草原も多かったが(小椋, 2012), 集落近くの山は里山として管理され、ブナ科やカバノキ科の落葉樹の二次林 (クヌギ, コナラ, イヌシデなど) や、マツ科の二次林 (アカマツなど) として、定期的な植栽や伐



図20. 外生菌根管理装置—目籠と熊手。
里山の管理方法は、絶え間ない林床管理である。下草刈りを行い、落葉落枝を取り除き、集まった有機物(落葉落枝等)を堆肥や燃料とした。そのための道具が目籠と熊手である。この単純きわまりない道具により、房総にかぎらず日本中の林床から、有機物がとりのぞかれ、林床は貧栄養に保たれ、貧栄養をこのむ外生菌根菌が増加した。里山管理が実践されていた日本中のマツ林等で、不安定な二次林を安定的に保つ原動力となったのは、この目籠と熊手である。左図：女性の背には目籠、手には熊手。現在の国府台から江戸川河畔の市川を望む風景。武蔵百景の内「下総鴻之台 市川の遠景」(部分), 小林清親作, 明治17年(1884年), 千葉県立関宿城博物館蔵。右図：女性の背には目籠、背後にはマツ林, 右手には桑畑が見られる。絵葉書「茂原市郊外諏訪ノ森」(部分), 千葉県立房総のむら蔵。明治末期。



図21. 生態園の林床管理.

千葉県立中央博物館のイヌシデ・コナラ保存林は、毎年冬期に下草刈りを行っている(上図)。従来の里山管理と異なるのは、資源(堆肥・燃料)として活用されていた林床の落葉落枝が完全に廃棄(下図、左・右)されてしまう点である。現在の里山林は、このように見世物の似非里山となっている場合が多い。撮影：2004年2月29日。



図22. 鴻之台植生変遷.

現在の千葉県市川市国府台里見公園付近の高台(図23下)から江戸川を眺めたところ。マツの下の植被は低い。対岸のヨシ原付近にもマツが見られる。鴻之台は、江戸日本橋から陸路約20 kmという比較的近い場所であったこと、古戦場であり周囲にも名所旧跡があったことなどから江戸時代の手頃な行楽地の一つであったため(天野, 2003a, b), 数多くの図が残された。富士三十六景「鴻之台とね川」, 歌川広重, 1858年, 千葉県立関宿城博物館蔵。

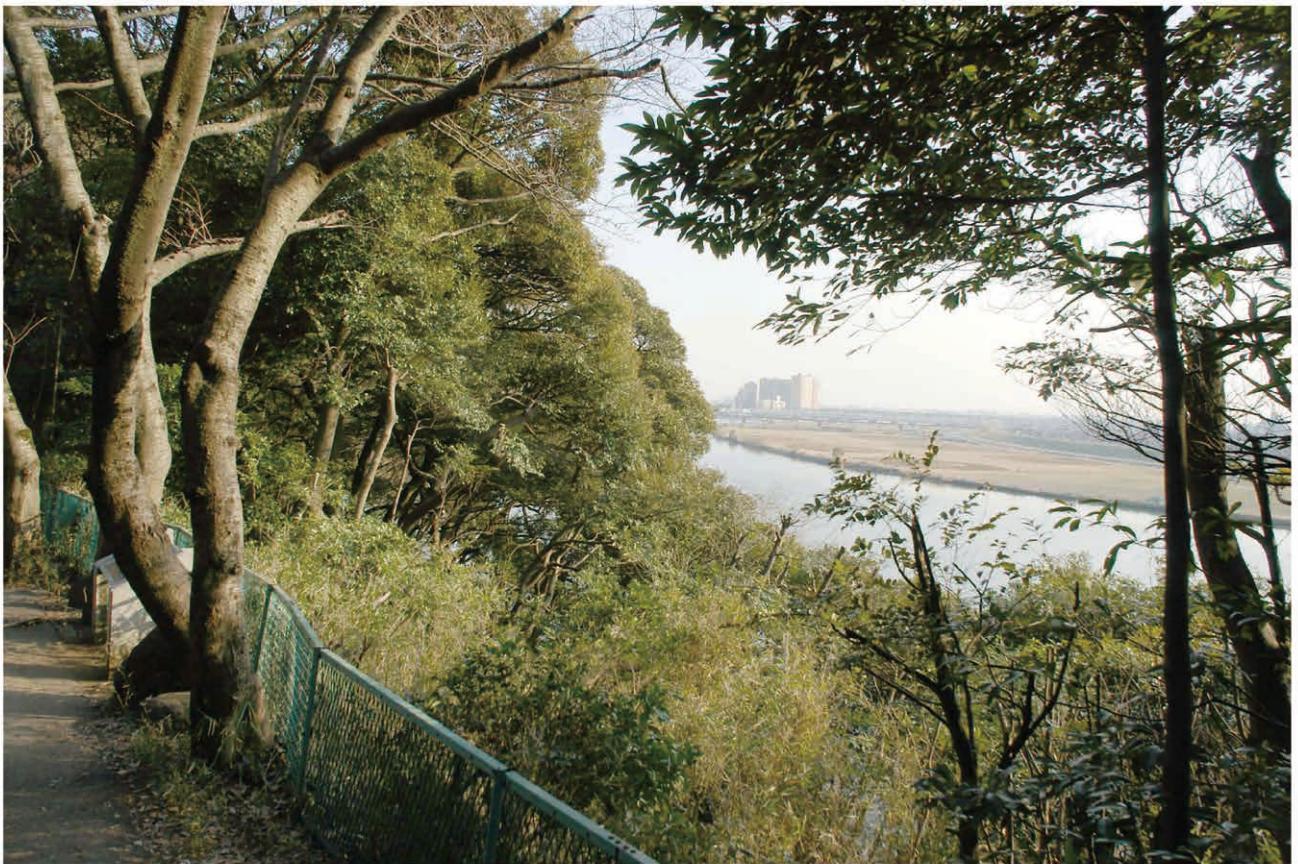


図23. 鴻之台植生変遷.

マツ林だったところが（上図）、人為的な手入れを欠くことによりシイ・カシ林に遷移（下図）した景観。現在の千葉県市川市国府台里見公園の高台から江戸川を眺めたところ。眺める角度や位置は図22とほぼ同じ。上図：大正時代頃は里見公園には背の高いマツが見られ、江戸川には帆掛け船が多数浮かんでおり物流の主役が水運だったことがわかる。本稿（6項、114頁）で述べたように、このような風景の中、下総の薪炭は利根川をとおる船橋を経て東京湾から東京へ運ばれ、下総の薪炭の商品価値が高まった。すなわち、この帆掛け船の風景が下総のマツ林を成立させた背景かもしれない。絵葉書「(市川名所) 鴻之台公園ヨリ江戸川ヲ望ム」、個人蔵。下図：管理されなくなると完全にシイ・カシ林に遷移する、里見公園，撮影：2005年3月16日。



図24. 鴻之台植生変遷.

マツ林だったところが(上図), 人為的な手入れを欠くことによりシイ・カシ林に遷移(下図)した景観. 上図: 現在の千葉県市川市国府台公園付近. よくみると右手から左手まで密なマツ林となっている. 絵葉書「(市川名所) 鴻之台公園ヨリ古戦場鐘掛松ヲ望ム」, 個人蔵, 大正時代. 下図: 左手の和洋女子大の建物付近から北の国府台公園付近は, 絵葉書のマツの時代からシイ・カシ林へと完全に遷移している. 撮影: 2005年3月16日.



図25. 市川市真間から国府台をのぞむ風景。
マツ林だったところが（上図）、人為的な手入れを欠くことによりシイ・カシ林に遷移（下図）した景観。上図：国府台の丘の上には、真間山弘法寺と思われる門が描かれている。丈の低い植生が描かれ、高木はマツを主体とする疎林となっている。武蔵百景之内「下総真間つぎ橋」（部分）、小林清親、1884年〔明治17年〕、木更津市郷土博物館金のすず蔵。下図：右手に和洋女子大学の建物が見られる。かつてマツや低木に覆われていた国府台の台地の上は、ほぼ全体がシイ・カシ類やクスノキ科の常緑樹で覆われている。撮影：2005年3月6日。

採と林床管理による維持管理される里山となった。特にマツという樹木は、建築材を得るために、また特に商品としての薪炭を得る林として大切にされ、房総半島の各地にマツが植栽されるようになり、各地でマツ林が見られるようになった。特に高い山がない房総半島は、広い地域が類似の植生となることが可能で、それが江戸時代からのマツ林であったと思われる。その結果、県内の多数の地域でマツ林が数百年間広く見られるようになった。しかし、明治を経て、昭和の前半頃から、里山としてのマツ林は必要とされなくなり、マツ林の管理が放棄され、元の植生であるシイ・カシ林にもどりつつある。また人為的な開発等でもマツ林は消滅し、現在ではマツ林は稀な林となった。

このような変遷をたどった房総のきのこ相の特徴は（吹春俊光,1996, 2019）、人為の影響が少なく数千年継続した植生であるシイ・カシ類など常緑ブナ科の森に見られる外生菌根菌類が第一の特徴であり、その次に人為的な二次林のマツ林のきのこ類や二次林のイヌシデ・コナラ、クヌギ林の外生菌根菌類が第二の特徴となった。特に江戸時代から昭和の初期まで房総で卓越していたマツ林に見られるハツタケをはじめとする外生菌根菌類が、数百年の間、房総人の身近な環境に発生し、房総で暮らす人々のハツタケ好きというきのこ嗜好をつくったと思われる。何世代にもわたりマツ林に囲まれた環境は、マツ林のきのこ、特にハツタケを最高とする房総人の味覚を決定した。またハツタケは変色性があり他種と容易に見分けることのできるということも重要だったかもしれない。

併せて、房総のハツタケとマツ林の記録をたどりながら、「絵葉書」資料は[明治後半から昭和前半]の、「文献」資料は[平安時代頃から昭和]の、そして「花粉分析」の結果は[数千年前から]の、我々をとりまく植生環境を示す重要な手がかりとなることを紹介した。

謝 辞

本稿を作成するにあたり以下の方々のご協力を頂きました。深く感謝申し上げます（五十音順）：小椋純一教授（京都精華大学）には図（図11）の引用についてご快諾頂きました；北川公子氏（千葉菌類談話会）には、房総のきのこ狩りの歴史をつたえる貴重な絵葉書資料を多数ご提供頂きました；腰野文男氏（千葉菌類談話会元会長）には、房総半島の菌類調査の最初の段階から、数多くの菌類調査に同行頂き、房総の菌類と自然について数多くのご教示を頂きました；田川裕美氏（千葉大学図書館）には、『千葉県千葉郡誌』に千葉市における大正時代のハツタケ採集記録があること、『八街町史』に明治時代の茸、茯苓、松露の掲載があることをご教示頂き、またご自身の論文の引用をご許可頂きました；古元隆行氏（兵燃興業株式会社）には、本原稿に反映できませんでしたが木炭のことなどの相談にのっていただきました；松平喜美代氏（佐倉野草会）には『印旛村誌』に掲

載された江戸時代における房総の茯苓利用を教えて頂くとともに、そのことを紹介した論文をお送り頂きました；米林伸教授（立正大学）には入手困難な花粉分析の文献をお送り頂き、文献内容についてもご教示頂きました。

また私の同僚である千葉県立中央博物館の研究員の方々にも多大なご協力を頂きました（以下、五十音順）：天野誠氏（植物分類学）には、房総の浮世絵や古い絵葉書情報についての情報の読み解き方、引用した絵葉書資料を多数提供頂き、また『延喜式』における房総産茯苓や馬の記述があることをご教示頂きました；内田龍哉氏（日本近世史）には『萬朝報』に掲載されたハツタケ情報をご紹介頂きました；大野啓一氏（植物生態学）には、関東の平地林の林床管理の写真（図18）の使用を御快諾頂いた他、武蔵野台地の平地林に関する文献を多数紹介頂きました；小出麻友美氏（日本中世史）には、茯苓が登場する平安時代の文書『中右記』を教えて頂き、また『延喜式』を含め現代語訳にご協力頂きました；白井豊氏（歴史地理学）には、江戸時代から明治にかけての房総におけるマツ林の分布・マツの多様な利用等について、数多くの文献や歴史をご教示頂きました。今回の房総のハツタケについての紹介は、白井氏の研究無しでは困難でした；下稲葉さやか氏（哺乳類学）には、房総半島におけるムササビの分布とマツ林の関係について、貴重な未発表のアイデアや資料をご提供頂きました；西内李佳氏（植生史学）には、房総における花粉分析の研究史と文献について多数御紹介頂きました；糠谷隆氏（民俗学）には、大根分館所蔵の茯苓突きの貴重な写真を提供頂きました。

成田市には「ムササビ形埴輪」写真の利用許可を頂きました；木更津市郷土博物館金のすずには所蔵する浮世絵の利用許可を頂きました；千葉県立関宿城博物館には所蔵する浮世絵の利用をご許可頂きました；千葉県立房総のむらには所蔵する絵葉書コレクションの使用許可を頂きました；千葉県立中央博物館には所蔵する浮世絵、屏風絵、絵葉書、稀観本、常設展示室のパネル画像や模型写真の利用許可を頂きました；雄山閣出版には図（図11）の引用についてご快諾頂きました。

本研究は、千葉県立中央博物館重点研究「古写真を用いた県内の景観変遷の解析」（2017年–2019年：代表者、島立理子；2020年–2022年：代表者、小田島高之）の助成を受けました。

引用文献

- 天野 誠. 2003a. 江戸川の河畔（国府台）。所収 千葉県立中央博物館（監）・天野 誠（企）・原田 浩（編）、野の花・今昔、pp. 44–49. うらべ書房、木更津市。
- 天野 誠. 2003b. 浮世絵と絵葉書で見る房総の原風景。所収 千葉県立中央博物館（監）・天野 誠（企）・原田 浩（編）、野の花・今昔、pp. 66–81. うらべ書房、木更津市。
- 千葉県千葉郡教育会. 1926. 千葉県千葉郡誌. 1077 pp. 千葉活版所、千葉町（復刻版：1989, (株) 千秋社、東京）。
- 千葉徳爾. 1956. はげ山の研究. 237 pp. 農林協会、東京。
- 千葉徳爾. 1991. はげ山の研究（増補改訂）. 349 pp. そしえて、東京。

- 千葉徳爾. 1973. はげ山の文化. 233 pp. 学生社, 東京.
- 吹春公子. 2005. 千葉県産ハツタケの正体見たり!. 千葉県類談話会報 21: 23-25.
- 吹春公子. 2009. 続千葉県ハツタケ事情. 千葉県類談話会報 25: 46-48.
- 吹春公子. 2010. 房総きのこ今昔. 千葉県類談話会報 26: 12-13.
- 吹春公子. 2019a. 房総きのこ今昔—砂利山で採れたハツタケ—. 千葉県類談話会報 35: 11.
- 吹春公子. 2019b. 房総きのこ今昔—東葛地域の初茸狩—. 千葉県類談話会報 35: 17.
- 吹春俊光. 1996. 6章3節きのこ. 所収 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌 本編1 千葉県の自然 県史シリーズ40, pp. 251-257. 千葉県, 千葉市.
- 吹春俊光. 2000a. 特集/千葉キノコ話① 昭和5年から6年頃の松林のこと. 一宮から八積までのマツ林と海岸のマツ林の話, 宮本重吉さんのお話. 千葉県類談話会報 16: 17: 2.
- 吹春俊光. 2000b. 千葉キノコ話-君津周辺のきのこ-佐藤壽彦さんのお話. 千葉県類談話会報 18: 8-9.
- 吹春俊光. 2004. カゴとクマデがつくった里山の雑木林. 所収 吹春俊光・大作晃一 (著), 森の休日4 見つけて楽しむきのこワンダーランド. p. 61. 山と溪谷社, 東京.
- 吹春俊光. 2009a. きのこの下には死体が眠る!? 菌糸が織り成す不思議な世界. 232 pp. 技術評論社, 東京.
- 吹春俊光. 2009b. 勝浦の朝市のきのこ. 千葉県類談話会通信 25: 4-6.
- 吹春俊光. 2009c. 房総きのこ今昔. 千葉県類談話会通信 25: 43.
- 吹春俊光. 2012. 秋の野生きのこ—勝浦の朝市—. マイコファジスト 7: 20-21.
- 吹春俊光. 2017. 房総の森ときのこ その1 「マツ林のきのこ」. 千葉県類談話会報 33: 93-96.
- 吹春俊光. 2018. きのこの教え. 28 pp. 千葉県博図公連携事業実行委員会 (企)・原田浩 (編). 千葉県博図公連携事業実行委員会, 千葉市.
- 吹春俊光. 2019. 博物館ときのこ30年. 千葉県類談話会報 35: 70-101.
- 服部 保・赤松弘治・武田義明・小館誓治・上甫木昭春・山崎 寛. 1995. 里山の現状と里山管理. 人と自然 6: 1-30.
- 本郷次雄. 1987. ベニタケ科. 所収 今関六也・本郷次雄 (編著). 原色日本新菌類図鑑Ⅱ, pp. 44-74. 保育社, 大阪.
- 今井真一. 1993. 山と林. 所収 千葉市編纂委員会 (編). 絵に見る図でよむ千葉市図誌 (下), pp. 434-437. 千葉市.
- 稲田 晃・齋藤岳由・大浜和子・金子静子・島村健二・志水里美・夏秋満里子. 2004. 千葉県八千代市新川低地における4500年前以降の古環境変遷. 第四期研究 43 (1): 1-14.
- 稲田 晃・齋藤岳由・榎井 尊・西村祥子・大浜和子・金子静子・金子陽子・島村健二・志水里美. 2008. 千葉県八千代市新川低地における完新世の植生変遷と稲作の開始時期. 第四期研究 47 (5): 313-327.
- 大井 正. 1982. 武蔵野台地北部における平地林の利用形態. 地理学評論 55 (8): 549-565.
- 大井 正. 1992. 関東平野の平地林. 162 pp. 古今書院, 東京.
- 岩崎常正. 1844. 本草図譜 第54巻.
- 印旛村史編纂委員会. 1978. 印旛村史 近世編史料集Ⅱ, 817 pp. 凸版印刷 (株), 東京.
- 印旛村史編纂委員会. 1980. 印旛村史 近世編史料集Ⅲ, 835 pp. 凸版印刷 (株), 東京.
- 岸本定吉. 1998. 炭. 331 pp. 創林社, 東京.
- 川添訓子. 2009. 茸との出会い. 千葉県類談話会報 25: 15.
- 小林義雄. 1983. 日本中国菌類歴史と民俗学. 163 pp. 廣川書店, 東京.
- 腰野文男. 1994a. 海岸林のキノコ盛衰記—海岸林でキノコがたくさん採れた時の話 (盛その1)—鹿島のクロマツ林のキノコ (日記の一節より). 千葉県類談話会報 7: 2.
- 腰野文男. 1994b. 海岸林のキノコ盛衰記—海岸林でキノコがたくさん採れた時の話 (盛その2)—九十九里のクロマツ林のキノコ (日記の一節より). 千葉県類談話会報 8: 1.
- 腰野文男. 2000a. 特集/千葉キノコ話③ 佐原地方のキノコ方言. 千葉県類談話会報 16: 17: 5-7.
- 腰野文男. 2000b. 日刊紙情報①/キノコ記事コレクションと古い一枚の新聞記事. 千葉県類談話会報 18: 10-11.
- 前川啓二. 2017. ニツチ式. 千葉県類談話会報 33: 12-13.
- 松下まり子. 1991. 銚子半島高神低地の後氷期における植生変遷史. 日本生態学会誌 41: 19-24.
- 松平喜美代. 1989. ブクリョウ. 野草を訪ねて 7: 32-33.
- Neda, H. and Y. Doi. 1998. Notes on Agaricus in Kyushu District. Mem. Natn. Sci. Mus., Tokyo 31: 89-95.
- 落合啓二・繁田真由美. 2010. 千葉県にムササビは生息しているか?. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 11 (1), 37-49.
- 小川 眞. 1978. マツタケの生物学. 326 pp. 築地書館, 東京.
- 小川 眞. 1980. 菌を通して森をみる (森林の微生物生態学入門). 279 pp. 創文, 東京.
- 小川 眞. 1984. マツタケの話. 173 pp. 築地書館, 東京.
- 小川 眞. 1996. 4章1節 菌類. 所収 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌 本編1 千葉県の自然 県史シリーズ40, pp. 163-171. 千葉県, 千葉市.
- 小川 眞. 1998. 2章1節 森林・海岸. 所収 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌 本編4 千葉県の自然 県史シリーズ43, pp. 58-64. 千葉県, 千葉市.
- 小川 眞. 2013. マツタケと日本人. 所収 日本菌学会 (編), 菌類の事典, pp. 651-652. 朝倉書店, 東京.
- 小川 眞. 2007. 炭と菌根でよみがえる松. 324 pp. 築地書館, 東京.
- 大畑隆. 2019. きのこめしの思い出. 千葉県類談話会報 35: 4-5.
- 大野啓一. 2003. 植物の生活からみた種の減少・消滅過程—雑木林の林床草本を例として—. 所収 千葉県立中央博物館 (監)・天野 誠 (企)・原田 浩 (編), 野の花・今昔, pp. 108-119. うらべ書房, 木更津市.
- 小椋純一. 1992. 絵図から読み解く人と景観の歴史. 238 pp. 雄山閣, 東京.
- 小椋純一. 1994. 明治10年代における関東地方の森林景観. 造園雑誌 57 (5): 79-84.
- 小椋純一. 1996. 植生からよむ日本人の暮らし. 246 pp. 雄山閣, 東京.
- 小椋純一. 2012. 森と草原の歴史—日本の植生景観はどのように移り変わってきたのか—. 344 pp. 古今書院, 東京.
- 齋藤雅典 (編・著). 2020. 菌根の世界. 243 pp. 築地書館, 東京.
- 坂本浩然. 1835. 菌譜.
- 四手井綱英. 2006. 森林はモリやハヤシではない. 278 pp. ナカニシヤ出版, 京都.
- 下稲葉さやか・宮川尚子. 2019. ほにゆるい 千葉県立中央博物館 開館30周年記念 企画展. 8 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉市.
- 白井 豊. 2002. 明治10年代における下総台地西部の土地利用と薪炭生産—迅速測図と「偵察録」の分析を通して. 歴史地理学 44 (5): 1-21.
- 白井 豊. 2003. 下総台地西部の松林. 所収 千葉県立中央博物館 (監)・天野 誠 (企)・原田 浩 (編), 野の花・今昔, pp. 28-33. うらべ書房, 木更津市.
- 白井 豊. 2004. 享保期の下総台地西部における林畑開発の意義. 地理誌要 45 (2): 80-94.
- 白井 豊. 2005. 下総台地西部における松林の意義. 景観生態学 9 (2): 12-18.
- 白井 豊. 2007. 下総台地西部の牧とその周辺における薪炭林化—寛政期以降の変容. 歴史地理学 49巻2号: 1-21.
- 神道大系編纂会. 1993. 神道体系 古典編12 延喜式 (下). 771 pp. 精興社, 東京.
- 田川裕美・高橋 覚. 2021. 幕末下総の名主家文書にみる初茸贈答. 千葉県立中央博物館研究報告 15(2): 159-163.
- 高橋勝雄. 2014. 戦争施設に消えたショウロの園. 千葉県類談話会報 30: 35-37.
- 徳田あゆみ. 1995. 九十九里海岸のマツ林で掘ってきました. 千葉県類談話会報 12: 3.
- つげ義春. 1966. 月刊漫画ガロ 4月号: 103-110. 青林舎, 東京.
- 高野慎三. 1993. 解題. 所収 つげ義春, つげ義春全集 4, pp. 348-353. 筑摩書房, 東京.
- 辻 誠一郎・鈴木茂. 1977. 九十九里平野北部の沖積干潟層の花粉分析的研究. 第四紀研究 16: 1-12.
- 辻 誠一郎・南木陸彦・小杉正人. 1986. 館林の池沼群と環境の変遷史. 110 pp. 館林市教育委員会.
- 辻 誠一郎・南木陸彦・小池裕子. 1992. 下総台地西部における完新世後半の植物化石群と植生史. 植物地理・分類研究 40: 47-54.
- 辻 誠一郎. 2001. 2章1節 先史・歴史時代の植生. 所収 千葉県史料研究財団 (編), 千葉県の自然誌 本編5 千葉県の自然 県史シリーズ44, pp. 35-54. 千葉県, 千葉市.
- 米林 伸. 1995. 千葉市南部における完新世後期の植生変遷. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 3: 167-171.
- 田原 豊・中村 純. 1977. 千葉県における稲作の起源に関する花粉分析学的研究. 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班編「稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究-中間報告-」: 44-51.
- 八街町史編纂委員会. 1974. 八街町史. 846 pp. 第一法規出版 (株), 東京.
- 谷城勝弘. 1984. 千葉県のマツホド (ブクリョウ) を探る 1 マツホドの再発掘. 千葉生物誌 34 (1): 31-35.
- 萬朝報. 1919. 君津の初茸. 朝報社, 大正8年10月9日付け日刊. 3面.
- 増補「史料大成」刊行会. 1965. 増補史料大成第十二巻 (中右記四). 増補「史料大成」刊行会 (編). 389 pp. 臨川書店, 京都市.

**Fungus-eating Tradition in Boso as Revealed by
Picture Postcards and Ukiyoe
– Why is the Hatsutake Mushroom Loved in
Boso?**

Toshimitsu Fukiharu

Natural History Museum and Institute, Chiba
955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan
E-mail: fukiharu@chiba-muse.or.jp

The 'Hatsutake' mushroom (*Lactarius lividatus*) is found all over Japan. It can be said, however, that it is only in the Boso region, which forms part of Chiba Prefecture, that the Hatsutake mushroom is particularly favoured as food. Why? Based upon references such as picture postcards and written materials, this paper clarifies when the pine forests, on which the Hatsutake mushroom depends to grow, started to appear in the Boso Peninsula. This work also explains that pine forests, which are generally unstable secondary vegetation, have been stable for hundreds of years in Boso due to the fact that the pine vegetation has been maintained by managing ectomycorrhizal fungi, which have a symbiotic relationship with pine trees. As a result, pine forests have been dominant in Boso for centuries, which has led to the preference for the Hatsutake mushroom by the locals.